

様式 4

平成 25 年度 学術振興基金助成による成果報告書

平成 25 年 12 月 18 日

学 長 殿

所属部局・職名 総合教育研究センター教授

申 請 者 名 五十嵐 敦

助成事業の区分 (該当するものに○印)	研究協力に関する事業 (学術出版・叢書・ <u>学会等</u>) 学術振興に関する事業 (学生・事務職員・その他の特別事業)
事業名	日本青年心理学会第 21 回大会
事業実施期間	平成 25 年 11 月 16 日～ 平成 25 年 11 月 17 日
成果の概要	<p>2013 年 11 月 16 日～17 日, 日本青年心理学会第 21 回大会を福島市のコラッセふくしまを会場に開催した。2 日間の参加者は延べ 250 人で全国から研究者・大学院生の参加があった。</p> <p>研究(口頭)発表 14 本(いずれも 30～45 分)と自主シンポジウム 2 本など密度の濃い学術交流が行われた。</p> <p>また, 講演「復興の中の青年とその心理」や準備委員会企画「東日本大震災・原発事故とフクシマの高校生」, 研究委員会シンポジウム「研究者がとらえる“青年”とは」など, 学会員はもとより本件助成金を生かして公開でも行ったため, 活発な議論と今後に向けての大きな成果が多方面から得られたと来場者から好評であった。</p> <p>東日本大震災, 福島第一原発の事故により世界中から「フクシマ」として注目されるようになってしまった。このような状況で青年の自立に向けた取り組みやその姿から, あらためて青年期の心理について考える機会となったようである。生涯発達において青年期は大きな移行期として注目されてきた。そこには迷いや不安とともに社会化の過程を通じて自立という課題への積極的な取り組みが含まれている。震災後の福島も同じような過程にあるともいえる。そのような中で多くの研究者が福島で「青年」について実証的データに基づいて語り, 今後の研究への意欲を新たにしていたようである。その成果がこれからの福島の発展にもつながることを願っている。</p>

日本青年心理学会 第21回大会ご案内

会期：2013年11月16日(土)・17日(日)

会場：コラッセふくしま 5F (福島駅西口徒歩2分)

内容

(1) 研究発表(口頭発表)・自主シンポジウム

(2) 準備委員会企画セミナー(1日目)

「青年への過渡期；中学生の社会的行動の調査から」

話題提供；二宮克美(愛知学院大学) 氏家達夫(名古屋大学)

(3) 準備委員会企画(2日目)

「東日本大震災・原発事故とフクシマの高校生」

—被災地の高校が経験してきたこと— 武内義明(相馬高校)

(4) 研究委員会シンポジウム(2日目)

研究者がとらえる「青年」とは

話題提供；都筑学(中央大学)

指定討論；平石賢二(名古屋大学) 溝上慎一(京都大学) 千島雄太(筑波大学)

FURE,ACF 共催企画；若者自立支援「大学生と高校生の交流会」(2日目)

※一部公開；詳細は大会準備事務局まで。(福島大学学生・教職員無料；資料代1,000円)

問合せ先

〒960-1296 福島市金谷川1番地 福島大学キャリア研究部門

日本青年心理学会第21回大会準備委員会委員長 五十嵐敦

Tel./Fax. 024-548-8162 (ファックスかメールでお願いします)

第21回大会専用 Email アドレス career@educ.fukushima-u.ac.jp

プログラム詳細 (学会HP；<http://www.gakkai.ac/jsyap/>)

本大会は福島大学学術振興基金の援助を受けています。